

ラフマニノフの思い出

自分が今のようにクラシック好きになったのはいつなのか。これまでは、高校時代に原点があると思っていた。

私は、高校1年生の時に、両親たちとともに大阪郊外の新興住宅地に引っ越した。高度経済成長の真っ盛りの時期で、引っ越した翌年の正月の新聞に「住宅双六（すごろく）」という付録が付くような時代だった。これは、ふり出しの「赤ん坊」からスタートして、上がりの「庭付き郊外一戸建て住宅」をめざす双六で、正月に家族や親戚でサイコロを振って楽しんで下さいという趣旨だったのであろうが、それは当時の人々にとっての人生の目標を表していた。

私の父は、幸運にもその目標を達成することができ、大阪の郊外に庭付き一戸建て住宅を建て、一家で引っ越した。しかし、林や荒地を切り開いて造成された団地は、まだ家がちらほら建っているだけで、まわりは一面赤茶けた土が露出していた。私の家も、庭には木が一本もなかった。私はその家から高校に通い始めたが、意に沿わず入学した学校で、友達もできず、授業が終わるとすぐに家に帰ってきて、庭の土のどこからともなく出てくる蟻たちを木の棒でつぶしていた。

このすきんだ心を慰めてくれたのが、たまたまラジオから流れてきたビートルズの音楽だった。それは、少し前のビートルズの解散を惜しむ大型の企画で、連日にわたってビートルズのほぼ全曲を流した。この特集を聴いて耳が音楽に慣れた私は、どういふわけかロックやフォークには向かわず、クラシック音楽を聴くようになった。これもたまたま家に音楽全集があったことが影響していたのだらう。河出書房新社の「世界大音楽全集」で、各巻にLPレコードが2枚ずつ付いていた。そのころ、そういう全集や百科事典を家にそろえるのは、ある種の流行だった。私の父は別段クラシックが好きなのではなかったが、家電ブームに乗って、当時「ステレオ」と呼ばれていたオーディオ装置を買った。そして、せっかく買ったステレオを使うにはレコードが必要ということで、毎月1巻ずつ届く音楽全集を注文したのである。私は後年、大学時代の友人の家に遊びに行き、彼の実家にも全く同じ全集がステレオのそばに並んでいるのを見て驚いたことがある。

こうして私は高校時代にクラシック音楽が好きになり、大学に入ってから、楽器の演奏経験がほとんどないにもかかわらず、大学の交響楽団に入部した。だから、私にとってクラシック体験の原点が高校時代にあるのは間違いない。だが、今になってラフマニノフと自分との関係を思い返してみると、その思い出は高校時代よりもっと古い。

ラフマニノフの音楽、特にピアノ協奏曲第2番は、これまで様々な映像のバックに使われてきた。私より若い世代の人は、浅田真央さんのフィギアスケートの音楽に使われていたことを思い出すかもしれない。あるいは、もう少し前に、漫画『のだめカンタービレ』の中で千秋センパイが演奏していた。しかし、私の記憶にあるのは、もっともっと昔にテレビで見た『逢びき』という題名の映画である。ウィキペディアによれば、このイギリス映画の日本語吹き替え版がテレビで初めて放送されたのは、1964年4月29日の午後2時からだそう。わが家にテレビが来たのは、その年の10月に開催された東京オリンピックの直前だったような覚えがあるので、この放送は見ていない可能性が高い。おそらく、その後、小学校高学年か中学生の時に再放送を視たのだろう。

『逢びき』（原題：Brief Encounter、短い出会い）は、それぞれ家庭を持つ男女の短期間の出会いを描いた恋愛映画だ。小中学生の私に、そんな大人の感情の揺れがわかるはずもない。しかし、薄暗い夕刻に駅舎の横を蒸気機関車が煙を吐きながら通り過ぎる冒頭のシーンで、ラフマニノフのピアノ協奏曲2番のピアノの音が重々しく始まるのを鮮明に覚えている。この映画は、恋愛と倫理観がからむストーリーによって評価されることもあるが、後世に残る名作になったのは、絶妙に配置されたラフマニノフの音楽のおかげだと思う。ラフマニノフの音楽がなければ、単なるメロドラマの一作品で終わっていたであろう。

ラフマニノフに関しては、もう一つ古い記憶がある。先に挙げた「世界大音楽全集」の中にはレコードとともに解説のページがあり、それぞれの作曲家の伝記も載っていた。ラフマニノフの伝記の中に、ラフマニノフが晩年、それまで対立していたストラヴィンスキーと和解した、というようなエピソードが書いてあった。なぜか私はこのことをずっと記憶していたのだが、この記憶が正しいかどうか確かめたいと思っても、もう実家にも私の家にもこの全集はない。そこでネットで探したところ、神奈川県の川崎市立中原図書館が収蔵していることがわかった。最近この図書館に出かけて行って、書庫から出してもらった。次の文章が載っていたので私の記憶は正しかった。

1942年の春、彼（ラフマニノフ）はその演奏を賛嘆し、その人柄を愛していたホロヴィッツのカリフォルニア、ビヴァリー・ヒルズの家近くに、プール付きの家をもとめ、移り住む。彼はしばしばホロヴィッツと連弾して時を過ごす。少数の幸運な友人は、この恐るべき世紀の連弾を聴くことができる。そしてある

日、放送で「火の鳥」を聴き、涙をながし、「天才以上のものがここにある、これこそほんとうのロシアだ」とつぶやいたラフマニノフは、好敵手と和解することを思いつく（ストラヴィンスキーが作曲家ラフマニノフをみとめなかったように、ラフマニノフは「春の祭典」以後の諸作品を絶対にみとめようとしなかった）。ハリウッドに住んでいたストラヴィンスキーは、招かれてラフマニノフを訪れる。彼らは友情を感じながらも、お互いにぎこちなく、音楽以外の話題をもとめて苦勞する。息子や娘の家族がフランスで抑留されていた同じ境遇が、好個の話題となる。それでもストラヴィンスキーは、野生の蜂蜜をおくりとどけたり、ラフマニノフを招きかえしたりしている。（北沢方邦「ラフマニノフの生涯」世界大音楽全集第 21 卷より）

ストラヴィンスキーは、ピアニストとしてのラフマニノフは認めていたが、作曲家としては全く認めていなかった。彼が 1939 年から 40 年にかけてハーバード大学で行った講義『音楽の詩学』の中でも、チャイコフスキー、グラズノフ、ショスタコーヴィッチなどたくさんのロシア、ソビエトの作曲家について論評しているのに、ラフマニノフについては全く言及していない。しかし、ラフマニノフとストラヴィンスキーは、遠く離れたヨーロッパにいる子どもたちのことを心配する父親という点では共通していた。ふたりが会食した 1942 年、ヨーロッパでは第二次世界大戦の戦渦が拡大していた。

翌年の 1943 年、ラフマニノフはアメリカ西海岸のビヴァリー・ヒルズの自宅で息を引き取った。そして、その 2 年後の 1945 年に映画『逢びき』の撮影がイギリスの田舎町カーンフォースで始まり、ドイツ軍が降伏した 5 月に撮影が終わった。

ラフマニノフの音楽は生前から、多くの批評家によって、「時代遅れ」「大げさな旋律」などと酷評され、その人気は長くは続かないだろうと言われた。そうした批評が誤っていたことは、本日の演奏会をはじめ今でも多くの演奏会でラフマニノフの音楽が演奏されていることや、様々な映像のバックグラウンドに使われ続けていることから明らかとなっている。そして、映画『逢びき』の名作としての評価が長らえているのも、ラフマニノフの音楽の永続性によるところが大きい。『逢びき』の映画監督たちは、先見の明があったと言える。

（[名古屋大学交響楽団第 117 回定期演奏会パンフレット](#)）